

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510322

研究課題名(和文) 環大西洋におけるカルヴァン主義諸派のディアスポラ形成とピューリタン植民地の展開

研究課題名(英文) The Development of Transatlantic Calvinist Diaspora and Its Relation to the New England Puritan Culture

研究代表者

増井 志津代(Masui, Shitsuyo)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：80181642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：主要なリサーチは、ハーヴァード大学を中心に行った。さらに、英、仏、蘭、伊へ調査に赴き、改革主義の国際的展開に注目した。改革主義は国際的運動ながら各地の環境に応じ特異な発展をする。そのディアスポラの展開に着目する時、17世紀ニューイングランド研究は、絶対王政のイングランドとの対比より、ヨーロッパ諸都市(蘭、伊)との比較が有用であると思われる。信仰共同体樹立と共に商業を経済基盤として発展したボストン等の都市は、スイス、蘭、伊の共和主義的諸都市に似ている。18世紀以降は、ピューリタニズムと敬虔主義との関係が重要となり、アメリカ特有の福音主義が誕生する。最終年度、D. Hall教授を上智大に招聘した。

研究成果の概要(英文)：The primary research for this project was conducted in Harvard libraries and archives. Additional research trips to the UK and Europe made it possible to track the transatlantic dissemination of ideas as well as historical dispersion of the international Reformed communities. Although the Reformed had certain theological convictions and practices in common, the local developments varied for each "diaspora" and shaped its features according to distinctive lived experiences. I broadened the basis of the study of 17th-century NE Puritanism by comparing the colonies with the Dutch commerce-oriented cities as well as republican city-states in Europe, rather than merely with the States and the cities of monarchical Britain. I also studied the interaction of NE Puritanism and Continental Pietism, which was a major factor in the formation of the Evangelical Protestantism that has predominated in the US from the 18th century on. Dr. David D. Hall was invited to Sophia U on the final year.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：ピューリタニズム カルヴァン主義 ニューイングランド 大覚醒運動 アメリカ合衆国 敬虔主義
ホイットフィールド エドワーズ

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代より継続してきたニューイングランド・ピューリタニズムの研究を2006年『植民地時代アメリカの宗教思想—ピューリタニズムと大西洋世界』(上智大学出版)として一冊の研究書にまとめて出版した。しかしながら同書の副題とした「ピューリタニズムと大西洋世界」についての研究は充分なされたとはいえず、論考の殆どがアメリカ国内に関するものとなっていた。それまでの研究では英国やヨーロッパでの調査を行わなかったことがその一因だと反省された。そこで、本研究ではこの点についてさらに掘り下げることを目指した。

(2) 2011年4月から2012年3月は研究年季にあたり、上智大学より海外研修を認められた。そのため一年間、ハーヴァード大学に研究員として所属する機会を得た。これにより、本研究プロジェクトに集中することができた。

(3) ハーヴァード大学を拠点とした研究交流を行う準備は十分整っていた。研究協力者のDavid D. Hall 同大学教授は大学院時代の博士論文指導教授の一人で、ニューイングランド研究についての指導を1990年代より受けていた。また、その他の同大学所属研究者とも、2004年4月～2005年3月、同大学宗教学プログラム研究員を務めた時以来交流を継続していた。

(4) 日本国内では、初期アメリカ学会、日本ピューリタニズム学会参加により、この課題に関心を抱く研究者との意見交換や研究報告の場を得ることができた。

2. 研究の目的

(1) 16～18世紀という長期スパンを取り、宗教改革期以降環大西洋に離散し形成されたカルヴァン主義諸派のディアスポラとニューイングランド・ピューリタニズムとの関係を、出版文化や人的ネットワークを軸に探る。ピューリタニズムの生成と展開を、イングランド・ディセンター、スコットランド長老派、オランダ改革派、フレンチ・ユグノー等の移動と、それにより各地に形成されたカルヴァン主義ディアスポラ間交流の内に位置づける。

(2) アメリカ植民地におけるカルヴァン主義諸派とピューリタン植民地の関係をカルヴァン主義諸派が文化的影響力を獲得する第一次大覚醒期に至るまで検証する。ニューイングランドに築かれたピューリタン植民地を改革派諸グループが築いたディアスポラの一つとして捉え直す。これにより、アメリカ的アイデンティティの根幹を担ってきたとされるピューリタニズムを環大西洋世界における交流の中に位置づけ、一国史的ピューリタン研究からの脱却を目指す。

(3) アメリカの国家的アイデンティティと結びついてきた研究とは異なる視点での研究を目指す。

現代アメリカにおけるピューリタン研究

は、国家的アイデンティティ模索作業と緊密に結びつく傾向を持っていた。20世紀初頭、Perry Miller は、ピューリタン思想の複雑さと重層性を強調し、その特徴が R. W. Emerson を経て、アメリカ独自の精神を形成する支柱となったと論じた。しかし、こうした研究は、20世紀後半から21世紀にかけて、多文化主義者 Amy Kaplan 等により強く批判された。すなわち、Miller 等の研究が、ヨーロッパによる帝国主義的拡張の世界史的文脈上に合衆国史を組み入れることを阻止したと Kaplan は論じたのである。実際、アメリカにおける研究の多くは、現在でもニューイングランドという一定の地理的枠組みにおけるピューリタニズムの特殊性追求となる微視的視点からの研究が多い。

本研究では、Kaplan 等の批判を踏まえて、一国一地域主義的研究からピューリタン研究を解放し、ヨーロッパやイングランドの帝国主義的拡大を含めた環大西洋交流史上にニューイングランド・ピューリタニズムを位置づけ検証することを目的とした。ニューイングランドは、ジュネーブ宗教改革以降各地に離散したカルヴァン主義諸グループが築いた複数のディアスポラのひとつとして捉えられる。こうした研究は Menna Prestwich や Patrick Collinson 等、英国の宗教史研究者により既実践されている。研究代表者はこうした視点を取り入れて「ピューリタニズムとインターナショナル・カルヴィニズム」(2006)、「ピューリタニズムと寛容主義—王政復古期以降のニューイングランドを中心に」(2006)において、環大西洋史の中でピューリタニズムを見直してきたが、本研究ではさらにこれを追求することとした。

(4) 北アメリカ植民地における第一次大覚醒期とカルヴァン主義ディアスポラの関係。

Ned Landsman は、米国における植民地時代思想研究がニューイングランド・ピューリタニズムを極端に中心に据えている点を批判し、スコットランド系長老派の中部植民地における役割の重要性を論じた。また、Thomas Kidd は、18世紀以降主流となるプロテスタント福音主義はイングランド、スコットランド、大陸ヨーロッパ、西インド諸島に広がる国際運動の中で醸成され、その原点を新大陸におけるカルヴァン主義グループを中心とした第一次大覚醒にあるとした。こうした研究も踏まえて、本研究ではブリテン帝国をさらに越え、ピューリタニズムのルーツを大陸宗教改革期にまで遡り、英米の関係だけでは説明しきれない、スイス、ドイツ、オランダのカルヴァン主義とピューリタニズムの影響関係を検討する。

(5) 本研究では、印刷文化に注目する。書簡等の手稿や図像も調査対象とする。聖書主義を貫くカルヴァン主義者は、文字文化の担い手となり、ヨーロッパの印刷文化に大きく貢献した。ロンドン、アムステルダム、フラ

ンクフルト等の都市を結ぶカルヴァン主義交流網をたどることにより、カルヴァン主義ディアスポラの特徴や大西洋世界における相互関係の究明が可能となる。さらにこのネットワークを利用して大覚醒期に印刷出版者として成功した Benjamin Franklin のヨーロッパ体験について背景を探る。これにより、ディアスポラ間交流網の成り立ちとその中で育まれるピューリタニズムの思想文化的特質を検証する。カルヴァン主義諸派に属する人々は、新大陸やカリブ海へと進出し、宗教的、文化的、そして経済的に北アメリカで台頭する。離散者によりディアスポラ的に形成されたニューイングランドを中心とする諸共同体が、第一次大覚醒期にその影響のピークを迎えるに至った経緯を長期スパンの中から解明し、その展開のダイナミズムを探る。

3. 研究の方法

(1) ハーヴァード大学を中心とした米国における資料収集と調査、及び国際的研究提携を行った。宗教史研究については David D. Hall 教授の協力のもとで行う。本研究は宗教史と環大西洋史を結びつけた研究であるが、環大西洋史に関しては David Armitage, Joyce Chaplin 両教授に助言を求め、英国やヨーロッパでの調査の指針を得ることとした。文学ではヨーロッパ各地の状況に詳しい Werner Sollors 教授に助言をあおいた。また、同じく文学研究者の John Stouffer 教授からも宗教と文学、人種といった観点において示唆を得た。

以上、研究協力者及び専門研究者と意見交換を行いながら研究方向の調整をはかりつつ、同大学ワイドナー図書館、アーカイヴ、神学部図書館を中心に資料調査収集を行った。さらに、覚醒運動に関する Jonathan Edwards や Timothy Dwight に関する資料調査のため、イエール大学バイネッケ図書館、スターリング図書館を利用した。第二次大覚醒と Henry Ward Beecher に関する研究のため、イエール大学に加えてニューヨーク公共図書館を用いる。

(2) 大英図書館を中心とした英国での資料調査を行う。ここでは、ロンドンで亡命生活を送った改革派の軌跡を追うことを目的とした。また、学会や研究会で、英国を基盤とする研究者との交流をはかる。

(3) 大陸ヨーロッパの大学、図書資料館で調査を行う。ディアスポラについての研究であるためスイス、フランス、オランダでの調査が必要となり、現地へ赴き、アーカイヴ等で調査した。

4. 研究成果

(1) 2011年4月～2012年3月、上智大学よりのサバティカル期間中、ハーヴァード大学大学院アメリカ研究科に研究員として所属した。これにより、当初予定していた研究者との交流に加えて、定期的開催されるアメリカ宗教史コロキウムで、さらに多

くの研究者や学生と意見交換をすることができた。アメリカ研究以外にもヨーロッパ研究所の研究会にも参加し、特に「ハーバースと宗教」(Habermas and Religion)と題された学会で啓発を受けた。Max Weber, Carl Schmitt, Habermas と続くドイツ思想と宗教との関係について、「公共と宗教」が取り上げられた点が本研究の方向と関係しており、大変刺激を受けた。

また、ワシントン DC の Folger Library で行われた King James Version 400 年記念学会、バルチモアで開催された American Studies Association の年次大会に参加することができた。

(2) 一国史的な研究に陥らないように、本研究では英国、ヨーロッパへと研究の場を広げて行った。イングランドでは、まず、大英図書館を中心とした資料調査を行った。当初は Theodore de Bry 等、改革派の亡命者による活動を調べる予定であったが、Stranger Church についての調査の方が本研究の目的に必要なとの見解を抱くにいたった。そのため、フランスやオランダからの亡命者が築いた Stranger Church に関する資料にあたった。この過程で見つけたユグノーをめぐるロマンスは一つの作品群をなしており、文学研究として今後展開させて行くことができると思われる。

オクスフォード大学ではクライスト・チャーチ・カレッジで開かれた Ecclesiastical History Society の年次大会に参加した。比較的少人数の学会で、研究交流を行うことができた。Diarmaid MacCullach を始めとする、英国の研究者は研究視野が広く、アメリカの微視的な研究とは異なる観点からの思想史研究について教示されものがあつた。Puritanism や Calvinism については、アメリカのそれとは異なる解釈があり、英米の研究を包括的なものとしていくのは至難の業となるが、いずれにも属さない日本人研究者としての独自の研究の可能性があることを確認できたのはひとつの成果といえるだろう。

(3) オランダ、イタリアの調査を経て、都市における共和制と商人との関係が、初期アメリカのピューリタン社会、そしてカルヴァン主義のディアスポラを理解する上で重要であることがわかった。

当初は英国とアメリカとの関係を主軸に考察していたが、思想史・宗教史的には大陸ヨーロッパの商業都市(特に港湾都市)との比較研究が欠かせないと思うに至った。ヴェニス、フィレンツェにおけるイタリア諸都市の共和制はプリマスやマサチューセッツ湾建設のモデルとなった可能性がある。ルネサンス、宗教改革の流れに改革派ディアスポラを置き、これを軸にした思想継承をさらに解明していく必要があると思う。

実際に Pilgrims が滞在したライデンに行くと、Bradford が記した悲観的な都市生活とは異なる側面が見えてきた。特に牧師 John

Robinsonが残留したSt. Peter's Churchは、Jacob Arminiusも関係した教会で、当時の神学の重要な拠点であった。Bradfordの記録では、生活面での苦勞が浮き彫りにされているものの、プリマス植民地を築いた一団は、思想的に当時の最新の学問に接していたことが確認できた。Mayflower Compactという近代政治文書の優れた規範を残したこの一団には、巡礼父祖—suffering servants—としてのイメージに回収されない側面があったと思われる。これについてはさらに究明する必要がある。(Bradfordの“Of Plymouth Plantation”には、彼が共和制ローマに関心を持っていたと思われる例が散見される。プリマスの政治体制とイタリア共和制との関係は前述の通り今後の研究課題の一つとしたい。新約聖書の初代教会をモデルとした共同体形成を目指すピューリタンの原初主義的な側面が、初代教会の政治背景を通してローマと結びつく。おそらくこの流れで、Bradfordは共和制ローマの賢人達に注目したのかもしれない。)

(4) 宗教思想に着目して開始した研究であるが、思想は社会や人々の生活と切り離されて存在するものではない。それを育んだコンテクストを考慮すると、カルヴァン主義を支柱とする共同体であっても政治、経済的側面が重要となる。

本プロジェクト遂行中エルティス、リチャードソン著『環大西洋奴隷貿易歴史地図』を和訳出版する機会があったことも影響し、植民地時代の商人や経済に着目する必要性を強くした。このため、奴隷貿易とニューイングランドとの関連を調査し、17世紀マサチューセッツ湾植民地の商人Robert Keayneについての研究論文を発表した。本論文では、Keayneの奴隷所有に言及したものの、公共倫理と植民地経済についてまとめるにとどまった。この研究は、さらに商人Samuel Sewallを加えてピューリタニズムと奴隷制度の研究に展開させたい。

(5) 第一次大覚醒運動に関する研究は、Jonathan Edwardsの著作を翻訳するにとどまった。(この翻訳は、近年中に新教出版社より刊行されるシリーズの一巻となる予定)大覚醒期と重なる奴隷貿易廃止への動きを考察するには、大陸敬虔主義の研究が必要となる。Edwardsの弟子でWhitfieldの影響を受けたSamuel HopkinsからBeecherへと続く、奴隷制問題への取り組みを考察するためには、ピューリタニズムと敬虔主義やメソジズムとの関係を探る必要がある。アメリカ福音主義は、ピューリタニズムと敬虔主義が融合した中で誕生したと思われるので、このあたりについても早急に研究を進めたい。

(6) 研究最終年度、海外研究協力者のDavid D. Hall教授を上智大学に招聘した。滞在中の講演・講義は次の通りである。

11月9日(土)午後3時～5時、上智大学2-510(初期アメリカ学会、上智大学ア

メリカ・カナダ研究所共催) David D. Hall 講演 “Ideas in Motion: The Fascinating History of Transatlantic Calvinism”

連続講義: History of Religion in America
11月11日(月)午後6時～7時半、上智大学2-1702(上智大学アメリカ・カナダ研究所、ピューリタニズム学会共催)

Lecture 1: “An Unfinished Reformation and its Critics: The Making of Puritanism”
課題図書: William Bradford, “Of Plymouth Plantation” (11-31); John Winthrop, “Christian Experience” (111-118) in Hall, ed., *Puritans in the New World: A Critical Anthology* (Princeton UP, 2004)

11月18日(月)午後6時10分～7時40分、東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

Lecture 2: “Did Protestantism Help or Harm the Making of Civil Society in Antebellum America?” 課題図書: トクヴィル『アメリカのデモクラシー』

11月9日の講演概要は初期アメリカ学会ニューズレター、No. 67(2014年1月30日発行)、論文は “International Calvinism and the Making of Puritan New England” と題されて、上智大学アメリカ・カナダ研究所『アメリカ・カナダ研究』31号(2013)に掲載された。

URL: <http://www.info.sophia.ac.jp/amecan/a/J2/journalj.htm>

その他、国際基督教大学、東京女子大学でもHall教授講演が開催された。いずれの講演にも、研究者、学生、一般の参加者が多く集まり、研究の社会への還元を行うと共に、若手研究者の育成の一助となったと思われる。

以上、本研究期間中に結果を出すことのできなかった課題も多くあったが、一定の成果を得ることができたと思う。この結果は、論文や出版の形で発表を継続していきたい。さらに、本研究プロジェクトを進める過程で得られた新たなテーマにも順次取り組んでいきたい。代表者一名による研究であったが、海外研究協力者を得ることで孤立した研究に陥ることはなかった。海外研究協力者のHall教授招聘を計画通り最終年に行うことができ、広く一般にまで還元することができたのは本研究の大きな成果であった。この分野における研究交流は、若手の専門研究者や学生を巻き込んで、今後も国際的に継続されるものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

増井志津代「マサチューセッツ湾植民地における『カルヴァン主義倫理』再考: Robert Keayne, “The Last Will and Testament”

(1653)を中心に、上智大学アメリカ・カナダ研究所『アメリカ・カナダ研究』、査読有、31号23-47頁、2014年

増井志津代 書評論文：『『アメリカ的理念の身体』と宗教思想史の可能性』、東京大学大学院総合文化研究所アメリカ太平洋地域研究センター『アメリカ太平洋研究』査読無、14巻139-145頁、2014年

Masui, Shitsuyo, Book Review: "R. G. Robins, Pentecostalism in America (Santa Barbara: Proaeger, 2010)"、東京大学大学院総合文化研究所アメリカ太平洋地域研究センター『アメリカ太平洋研究』査読有、13巻135-141頁、2013年

増井志津代「初期ニューイングランドにおける出版文化と公共プロテスタント・ヴァナキュラー文化の継承を中心に」『科学研究費補助金基盤研究(A)公共文化の胎動：建国後の合衆国における植民地社会規範の継承と断絶に関する研究』、査読無、78-90頁、2011年

〔学会発表〕(計1件)

増井志津代「マサチューセッツ湾植民地におけるピューリタン倫理と奴隷保有—Robert Keayne, "The Last Will and Testament" (1653)を中心に」ピューリタニズム学会第8回研究大会、聖学院大学、2013年6月22日

〔図書〕(計4件)

翻訳：エルティス、リチャードソン著、増井志津代(訳)『環大西洋奴隷貿易歴史地図』東洋書林、2012年

著書(共著：増井志津代、デイヴィッド・D・ホール、他6名)『キャサリン・マリア・セジウィックとピューリタニズム—『ニューイングランド物語』を中心に』、『キリスト教のアメリカ的展開—継承と変容』上智大学出版、105-129頁、2011年

翻訳：デイヴィッド・D・ホール著、増井志津代(訳)『ニューイングランドにおける権威の体験』同上、23-63頁、2011年

翻訳：マーク・A・ノール著、増井志津代(訳)『プロテスタント福音派と近年のアメリカ政治』同上、247-267頁、2011年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増井 志津代 (MASUI, Shitsuyo)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：80181642

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：